

2017年スケジュール

2017年6月22、23日
全国油症治療研究班会議

ホテルレガロ福岡〔福岡県福岡市〕に於いて開かれました。

全国油症一斉検診

下記の11班により年に1回実施しています。

昨年の研究成果

2017年6月22、23日に全国油症治療研究班会議が開催されました。多数の基礎的・臨床的研究の報告が行われました。その概要をご紹介します。

平成29年度全国油症治療研究班会議より 〔その1〕

毎年油症検診結果の集計を行っています。受診者の健康管理のため、また毎年の集計結果の積み重ねにより判明する症状の傾向や変化を治療研究に活かすために行っています。

福岡県保健環境研究所保健科学部の梶原淳睦先生は、油症検診の実施状況と平成28年度の油症患者さんの血液中PCDF等の濃度について報告されました。油症発症の最大の原因物質であるPCDF等は、分析技術の進歩によって、平成14(2002)年度から全国の油症検診で測定を行うこと

が可能となりました。

<報告内容>

平成28年度全国油症検診の受診者は648名(油症認定患者さん509名、未認定の方139名)であり、前年度とほぼ同数でした。このうち、PCDF等を測定したのは、認定患者さん147名、未認定の方が138名の計285名でした。これは油症ダイオキシン研究診療センターを受診した認定患者さん4名と未認定の方1名を含んでいます。PCDF等を測定された方は前年より65名増加しました。認定患者さんの血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度の平均は49 pg/g lipid、未認定の方は18 pg/g lipidでした。なお、未認定の4名で血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度が50 pg/g lipid以上でした。

奈良県立医科大学公衆衛生学講座の松本伸哉先生は、油症患者さんの体内中のダイオキシン類の排出速度について検討されました。

<報告内容>

主に2,3,4,7,8-PeCDFの体外への排出速度に関する研究を行い、英文論文に公表してきました。これまでに分かったことを以下に示します。

- (1) 血液中濃度が高いにもかかわらず、ほとんど濃度が減少していない患者さんたちがいます。
- (2) 血液中濃度が高いにもかかわらず、濃度が減少していない方が増加しています。
- (3) スギ花粉症などにより咳や痰が多い方は、半減期が短い傾向があります。
- (4) 体重の変化は見かけの半減期に影響を与えると報告されてきましたが、体重の変化は、一時的に濃度に影

平成29年度 自治体連絡先

福岡県班 (福岡県、大分県、宮崎県)
福岡県保健医療介護部生活衛生課食品衛生係
TEL: 092-643-3280

長崎県班 (長崎県、佐賀県、熊本県)
長崎県県民生活部生活衛生課食品乳肉衛生班
TEL: 095-895-2364

関東以北班 (東京都、川崎市、埼玉県、さいたま市、茨城県、横浜市、神奈川県、栃木県)
埼玉県保健医療部食品安全課食品保健担当
TEL: 048-830-3608

千葉県班 (千葉県)
千葉県健康福祉部衛生指導課企画調整班
TEL: 043-223-2638

愛知県班 (岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)
愛知県健康福祉部保健医療局生活衛生課食の安全・安心グループ
TEL: 052-954-6297

大阪府班 (滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)
大阪府健康医療部食の安全推進課安全推進グループ
TEL: 06-6944-6705

島根県班 (島根県、鳥取県)
島根県健康福祉部薬事衛生課食品衛生グループ
TEL: 0852-22-6487

広島県班 (広島県、岡山県)
広島県健康福祉局食品生活衛生課
TEL: 082-513-3106

山口県班 (山口県)
山口県環境生活部生活衛生課食の安心・安全推進班
TEL: 083-933-2974

高知県班 (愛媛県、高知県、香川県)
高知県健康政策部健康対策課
TEL: 088-823-9678

鹿児島県班 (鹿児島県、沖縄県)
鹿児島県健康福祉部生活衛生課食品衛生係
TEL: 099-286-2786

響を与えますが、長期的にみると半減期に影響を与えているとは言えないことが分かりました。

油症検診の集計結果等から得られた油症患者さんの症状と、血中ダイオキシン類濃度との関連を調べています。油症患者さん特有の症状を見出し、治療研究に活かすために行っています。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターの小西さわ子先生は油症患者さんにみられる手掌紅斑について検討されました。

<報告内容>

油症患者さんの診察にあたり、手のひらが赤く、はれぼったい方が非常に多いように感じております。肝臓病の方にみられる手掌紅斑の状態に似ていますが、ダイオキシンとの関係については分かっておりません。そこで、皆様のご協力のもと、平成28年度の福岡県油症検診において、手のひらの写真撮影と、サーモグラフィー検査を行いました。その結果、手掌紅斑の有無と手のひらと手首の温度差には相関はなく、“手のひらの赤み”は皮膚表面温度の高さを反映していませんでした。今後、血液中ダイオキシン類濃度、年齢や内科のご病気などと手掌紅斑との関連についてさらに検証し、その病態を明らかにしたいと考えております。

九州大学大学院医学研究院呼吸器内科学の濱田直樹先生は、油症患者さんにおける肺サーファクタントの濃度を検討されました。

<報告内容>

肺サーファクタントは肺胞の表面を薄くおおって、表面張力を保つことにより呼吸を円滑にしている重要な物質です。肺サーファクタントの中にはSP-A、SP-Dという物質があり、様々な呼吸器疾患に関連しています。以前の研究で、油症患者さんの呼吸器症状や、血液中のダイオキシン類濃度と、血中のSP-A、SP-D値との関連を調べたところ、SP-D値と咳嗽、喀痰といった呼吸器症状に有意な相関があること、SP-Aの濃度と一部のダイオキシン類濃度に有意な相関がみられました。この研究では、そもそも油症患者さんのSP-A、SP-D値が、健常者と比較して上昇しているのかどうかを調べました。その結果、患者さんではSP-A値がごく軽度上昇し、SP-D値がごく軽度低下していました。いずれも軽微な変化であり、医学的に意義があるかどうかは慎重な判断が必要だと考えています。

九州大学病院整形外科の福土純一先生は油症検診を受診された方を対象に、ロコモティブシンドロームがあるかどうかを調査されました。

<報告内容>

7項目からなるロコモチェック項目のうち1項目でも該当する場合には、骨粗鬆症や変形性関節症、サルコペニアといった運動器疾患の合併が疑われます。平成28年度、福岡県での油症一斉検診の受診者(142名)を対象に、ロコモティブシンドロームの合併があるかどうか調査いたしました。その結果、チェック該当数が0だったのは69名(48.6%)で、過半数の受診者の方は何らかの項目に該当し、運動器疾患の合併が疑われました。チェック項目該当数を単変量解析したところ、年齢や体脂肪率、ダイオキシン類濃度(2,3,4,7,8-PeCDF、3,3',4,4',5,5'-HxCB(#169))と正の関連が認められましたが、多変量解析では、年齢のみと有意な関連が認められました。

ダイオキシン類による健康影響について研究しています。

長崎大学病院皮膚科・アレルギー科の富村沙織先生は、人間の体に存在する活性化T細胞が、油症患者さんの体においてどのような動きをしているか、可溶性CD26/DPP-4値を測定して検討されました。

<報告内容>

これまでの研究において、油症認定患者さんではTh17細胞より分泌される血清IL-17値が健常人と比べ高い傾向にあり、血清IL-22、IL-26値は低い傾向にあることが確認されました。これらのサイトカインはTh17細胞を直接、もしくは表皮細胞を通じて活性化します。患者さんではこのTh17細胞の生体内での状態が変化している可能性があります。そこで、活性化T細胞、特にTh17細胞に多く発現している分子、CD26/DPP-4に注目しました。今回は細胞に発現している分子そのものではなく、血清中の可溶性CD26/DPP-4値について患者さんと健常人を比較しました。その結果、血清中CD26/DPP-4値は患者さんで 992.8 ± 56.66 ng/ml、健常人で 800.7 ± 58.40 ng/mlで、患者さんで有意に高いことが分かりました($p=0.0215$)。この結果の意義については不明ですが、今後解明していきたいと考えています。

昨年の研究成果の概要は、油症ニュース33号に続きます。

～油症ホームページに関するお知らせ～

以下のホームページより、油症ニュースをはじめとする油症研究に関する書籍、報告集などが閲覧できます。治療に関する手引きなども掲載されておりますので、是非ご覧ください。

<油症に関するホームページ>

<http://www.kyudai-derm.org/part/yusho/>